

Habitat Japan Newsletter

ハビタット・ジャパン ニュースレター

Vol. **44**
August 2022



新型コロナウイルスの世界的感染拡大に翻弄され2年が過ぎようとした頃、世界を揺るがす出来事が起きました。ロシア軍によるウクライナへの侵攻が突如として開始されました。以来、戦禍を逃れるために自宅を追われ、国内外への避難を余儀なくされた人々の数は何百万人にも上ります。世界約70カ国で活動するハビタットは、ウクライナと国境を隣接するポーランド、ルーマニア、ハンガリーを中心に人道危機への緊急支援に取り組んでいます。

ON THE MOVE

2週間まで

緊急支援



BUILDING STABILITY

6ヵ月間まで

中期的
シェルター支援



侵攻直後より、ウクライナとルーマニアの国境2カ所に設置された難民キャンプへ暖房器具を提供しました。また、衛生用品、その他生活必需品を詰めたリュックサックを用意し、避難民の方々に配布しました。各国では、避難民の方がホステルやホテルに短期滞在できるよう支援しています。また、ポーランドの首都ワルシャワでは、主要な乗り継ぎ駅で避難民のための窓口を開設し、滞在先の支援に取り組んでいます。

避難先での6ヵ月程度の滞在を視野に入れ、家賃補助のあるアパートの確保をはじめ、利用できる居室を増やすために、既存の寮などの改修を支援しています。ポーランドのワルシャワでは、自宅やアパートを避難民に提供するホストファミリーの紹介を行っています。また、避難民やホストファミリー、一時滞り場所を提供する支援団体などに家具や寝具、また生活用品を配布しています。

LONG TERM SHELTER

6ヵ月以上

住宅支援

「支援を求める人のニーズに応える」という基本原則に基づき、ハビタットは避難先での定住を視野に入れた支援計画「Pathways to Permanence: 永続への道のり」の策定に取り組んでいます。ポーランドでは、避難してきた家族が利用できる住宅の戸数を増やすために、自治体やその他の団体に対して、住宅として提供可能な建物の改修など、これまで培ってきた住宅建築のノウハウを提供しています。また、中長期の住宅政策を実現するために政府と民間セクターとの連携を促進する役割を果たすことを目指しています。

ポーランドに逃れたマリナさん親子のストーリー:

ポーランドの首都ワルシャワ市内のワンルームのアパートに暮らすのは、ウクライナ中部の都市、ドニプロから避難してきたマリナさんと2人の娘さんです。

ロシア軍の侵攻が開始されたその日、夜明けに大きな爆発音が鳴り響き、自宅から5キロ先の空港が爆撃されました。「これが戦争だとは信じられませんでした」そう当時を振り返り話すマリナさん、避難するまでの間、空襲警報が鳴るたびに廊下に避難し、家族で身を寄せあい過ごしました。「全ての母親がそうであるように、子どもたちに生きてほしいと願いました」、夫を自宅に残しても、マリナさんは娘さん2人を連れて安全な場所に避難することを決めました。避難を開始する日、子どもたちには好きなものをリュックサックに入れるよう伝え、マリナさんは持てるだけの水と食料を用意し、避難用のバスに向かいました。そこで、マリナさんは涙を流す夫の姿を初めて見たことを思い出、涙ぐんでいました。「ママ、家に帰ろう、パパのところに帰ろうよ」、別れ際にそう訴えかけてくる子どもたちの命、そして未来を守るために、避難を開始しました。

マリナさんと娘さんたちは、西部のリヴィウ市に向かい、そこから更に西にある小さな町へと向かう道中、親戚の友人からポーランドのワルシャワでハビタットが住宅を支援している話を聞きました。「初めてこのアパートに入ったとき、夜中に警報で起こされることもなく、廊下に3時間座り続けることもなく、安心して眠れる場所がここにあると思いました」、マリナさん親子は少なくとも6ヵ月の間は今のアパートに滞在することができます。

「私たち夫婦はいつも忙しくて、したいことのために時間を割くことができませんでしたが、それが素晴らしいことだとは思っていませんでした」そう話すマリナさん、故郷に戻り、家族と安心して暮らせる日が一日も早く取り戻せることを願いながら、今、一つ屋根の下で子どもたちが安心して眠り、生きていることに感謝していると話します。



Go Toトラブルに代わる観光支援策の「県民割」や海外旅行者の受け入れが再開するなど、コロナ感染防止対策と経済活動の再開を目指す「ウィズ・コロナ(新しい生活様式)」の社会に移行しつつありますが、子どもや母子が暮らす福祉施設では、今もなお集団感染を避けるための徹底した対策が求められています。私たちが暮らす地域では、社会的孤立のない、住みよい地域づくりを目指して、様々な地域行事が再開されつつあります。ハビタットの施設修繕支援では、一時的でもそこに住まう人にとって住まいとなる施設や、暮らしを取り巻く地域の拠点となる施設が抱える老朽化や急場の修繕ニーズに応えることで、誰もが安心、安全に暮らせる住まい、そして地域を持てるよう取り組んでいます。

児童養護施設の修繕:子ども達の未来を築く住まいを整える

昨年に続き、本年もジョンソン株式会社によるご支援のもと、神奈川県横浜市にある4つの施設で修繕に取り組みました。その一つは、昨年度も同社にご支援いただいた障害児入所施設「横浜訓盲院」です。老朽化する築50年超の建物は、子ども達がより安心、安全に暮らすには至る所で補修が必要とされていました。昨年実施した居室の改修に続き、本年は傷みの激しい居室扉の交換と、全4フロアに一か所ずつ設置されている洗面台の改修を実施しました。洗面台には元々水用の蛇口しかなく、後から給湯用の蛇口が併設されましたが、子ども達が安全に利用することが難しく、真冬でも水を使わざるを得ませんでした。また、登校前の朝の時間帯は混雑し、コロナ禍で手洗いやうがいの機会が増えたこともあり、子ども達が快適に利用していくためには洗面台の改修が必要とされていました。



地区会館の改修支援:住みよい地域に欠かせない活動拠点

地区会館の改修を支援した神奈川県横浜市西区第4地区は14の自治会からなる、5,000世帯が暮らす地域です。会館は定期的に各自治会の会長と地区の福祉担当者による会合が行われるほか、住民のつながりを育み、孤食を減らす「みんなの食堂」の開催など、地域のさまざまな活動に欠かせない拠点施設となっています。しかし、50年以上前に建てられた会館のため、男女共用の和式トイレは老朽化に伴う不便さが目立っていました。イベントの際には子どもから大人まで利用する会館ですが、中にはトイレに行くのを我慢したり、近隣のコンビニにまで行く人もいたほどでしたが、自治会費や補助金だけでは改修費用を賄うことができず、住民の方たちは対応に悩んでいました。こうした事情を受け、ハビタットで元のトイレと隣接する空きスペースを使い、男女別のトイレへと改修を支援しました。改修工事の仕上げとなるトイレ前の廊下のペンキ塗りやトイレ内の網戸の交換には、改修をご支援くださったジョンソン株式会社の社員6名の方がボランティアとして参加くださいました。「せめてなにか御礼に」と地域のお母さんたちによる手作りのお菓子が振る舞われ、住民の方と交流する時間を持つこともできました。地域住民の方々をはじめ、ジョンソン株式会社の皆さま、ありがとうございました。



企業ボランティアとともに、子ども達が安心、安全に集える場を築く

新型コロナウイルスの感染の収束に伴い、この春から企業によるボランティア参加が徐々に戻りつつあります。ハビタットの活動を長年ご支援くださるブルームバークL.P.もその一つです。ハビタットの国内活動へのご支援にあわせて、施設修繕先の2施設と国内居住支援「プロジェクトホームワークス」で清掃・片付け支援に取り組む2世帯での活動に、合計20名の方がこの春に2年ぶりにボランティアとして参加くださいました。

施設修繕先の一つとなったのは、昨年同社によるご支援のもと、母子が暮らす一室の修繕を行った神奈川県内にある母子生活支援施設です。施設そのものは10年ほど前に建てられ、今も丁寧に維持管理がなされていますが、子ども達が放課後に利用する学童室の壁紙はところどころ剥がれている箇所がありました。これらは、経年劣化により剥がれた箇所もあれば、子どもたちが誤って剥がしてしまった跡などです。これまで以上に学童室で過ごす時間が多かった子ども達が、居心地よく過ごせるよう、5月、ブルームバークL.P.のご支援と社員ボランティアによるご協力の元、傷みのあった2面の壁をカラフルな壁紙に貼り替えました。



国内居住支援「プロジェクトホームワークス」は、都内を中心に、単身の高齢者や障がい者、また低所得者世帯などが抱える住宅確保の問題に向き合い、住まい探しを支援するほか、居室内の環境改善を目指した清掃と片付けに取り組んでいます。先日参加した地域の支援関係者が集まるネットワーク会議では、高齢者からの相談件数が急増しており、その対応に追われているという声が聞かれました。コロナ感染の収束に伴い、高齢者が社会とのつながりを取り戻しつつある兆候かもしれません。地域の相談センターを介してハビタットに寄せられる清掃・片付け支援のニーズに応えられるよう、引き続きボランティアと協力し、一人でも多くの方が安心・安全に暮らせる住まいを取り戻せるよう取り組んで参ります。

ホームパートナーストーリー： 困難を乗り越え、築いた生活の基盤

私たち国民のセーフティネットである「生活保護」は、「健康で文化的な最低限度の生活」を送れるよう、国が国民一人一人に保障している社会保障であり、国民が有する権利です。生活保護は、一定以上の困窮状態にある国民が最低限の生活を維持できるよう、衣食といった生活扶助をはじめ、住まいを借りるための住宅扶助、医療を受けるための医療扶助などから構成されています。しかし、ハビタットの国内居住支援「プロジェクトホームワークス」で取り組む住まい探しをお手伝いする方の中には、生活保護に対するスティグマ(差別や偏見)であったり、扶養紹介を通して親族に連絡が入ることを嫌がったりするなどの理由から、あえて生活保護に頼らず、長いこと困窮した生活を続けている方がいます。ハビタットが住まい探しをお手伝いした松本さん(仮名)もその一人です。路上販売の仕事をしてきましたが、住まいを借りるだけの金銭的な余裕は持てず、カプセルホテルやネットカフェ、時に路上で生活を続けてきたそうです。しかし、体調を崩し、突如入院することになりました。無事に退院することができましたが、退院後も通院が必要な状態です。日々の暮らしすら不安定な松本さんにとって、自力で医療費を支払い続けることは難しく、支援者からは長年ためらってきた生活保護の利用を勧められたそうです。そうした後押しもあり、生活保護の受給を決心した松本さん、退院後は一時的に生活困窮者支援団体が運営するシェ

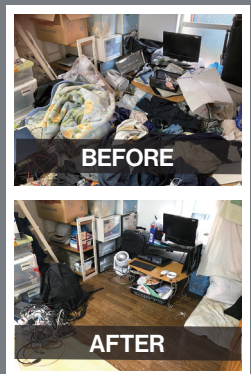
ルターに身を寄せることになりました。そこで、支援団体からハビタットに松本さんの住まい探しの相談が寄せられました。

そこからアパートに移るまでは、想像以上に時間を要することになりました。住まい探しには、その時点で置かれている住民票の取得が必要になります。しかし、生活の拠点を転々としてきた松本さんの住民票はどこを探しても見つからず、失効していたことが判明しました。そのため、新たに住民票を置こうとしたが、次は本籍地が分からず、最終的に法テラスの弁護士による協力を受け、家庭裁判所に戸籍の作成を申請するお手伝いから始まりました。戸籍を取り戻せたのは、住まい探しを始めてから5か月もの歳月が過ぎた頃でした。

アパートが無事に見つかり、転宅から3週間が経つ頃松本さんにお会いすると、「まだ慣れないですけど、ゆっくりやります」と話されていました。スマートフォンさえ初めて持ったという高齢の松本さんにとって、一人で住民票や戸籍の再作成に向き合うことになれば、住まい探しを途中で諦めてしまうと同時に、居住を持たないことにより、生活保護の利用が中止され、医療へのアクセスを失っていたかもしれません。ハビタットは、松本さんのように一人での住まい探しが困難な方をサポートすることで、一人でも多くの方が安定した生活基盤を持てるよう、引き続き入居支援に取り組んでまいります。

ホームパートナーストーリー： 今ある住まいを守るために

「もう家を追い出されたくないから、今後はきれいな状態を保ちたいです」そう話すのは3度の清掃・片付けを経て支援を完了した須田さん(仮名)です。須田さんはADHD(注意欠陥・多動症)をお持ちのため、片付けがとても苦手で、室内環境をきれいに保つことに大きな課題がありました。以前住んでいたお宅をごみ屋敷のような状態にしてしまったことから近隣トラブルとなり、引っ越しせざるを得なくなったそうです。そして、今のお住まいに越されてきてから一年、再び居室内の環境が悪化してしまいました。お話を聞くと、頼れる場がなかったことが伺えました。清掃業者に片付けを依頼したこともあったそうですが、その際に多額の請求がなされたことや、須田さんが信頼をおく福祉作業所に相談すると、「みんな自分で片付けてます」と言われてしまったことを教えてくださいました。今回の片付けを機にご自身でも気持ちを切り替えたいと話す須田さん、これまで利用をためらっていた生活援助の福祉サービスの利用を決めたことで、安心して生活し続けられる住まいを維持していくことができそうです。



ハビタットの活動に長年ご支援をお寄せくださるパークレイズは、新型コロナウイルス感染症の影響を受けている世界中のコミュニティを支援しています。日本では、ハビタット・ジャパンが取り組む児童養護施設等での施設修繕をはじめ、国内居住支援「プロジェクトホームワークス(PHW)」をご支援くださっています。その一部は、居室内の環境を改善するために必要な家具の提供や寝具の交換に使用しています。先日、同社のご支援で、生活困窮者の自立を支援し、個室シェルターを運営する「つくるい東京ファンド」や「TENOHASI」に、非常用トイレや保存水をはじめ、救急セットを含んだ緊急キットを40セット提供しました。いつ起こるか分からない災害への備えは欠かせません。パークレイズの皆さま、ご支援ありがとうございました。



GV休止後も続くインドネシアでの住居建築支援

ハビタット・ジャパンが海外建築ボランティア「グローバル・ビレッジ（GV: Global Village）」に参加するボランティアチームの派遣を継続する支援先の一つが、インドネシアのジョグジャカルタ特別州地域です。2015 年、同州内のセロバミオロ村でハビタットが取り組む住居建築支援に協働し、707 名ものボランティアを日本から派遣しました。同村でのプロジェクトを終えた 2019 年までに建てられた 278 軒のうち、約 3 割にあたる 81 軒の建築に日本のチームが携わったほか、住民の集会場となる 2 軒のコミュニティセンターの建築に寄与しました。現在は、同州でも特に貧困率が高いトゥクソノ村での住居建築プロジェクトを日本から支えています。

226 世帯の住宅建築を目指すトゥクソノ村の今

トゥクソノ村は人口約 8,500 人、2,700 世帯が暮らす村ですが、約 44%もの世帯が貧困世帯に区分されています。多くの家族が、日々の生計から家そのものの建築や修繕に必要な支出をまかなうことができず、構造的に脆弱な作りの家が目立つほか、水やトイレといった衛生設備が乏しく、屋外排泄といった衛生問題なども抱えています。こうした住環境も影響し、この村では幼児の発育阻害の割合が高く報告されています。家族を取り巻く住まいの環境を改善し、子どもたちが健全に育つよう、ハビタットは、同村で 226 世帯の住居建築を目指すプロジェクトを 2019 年 10 月に開始しました。



子どもたちの未来のために、住居建築を支援

GV プログラムの休止が続く中、インドネシアと協働で日本のインターナショナルスクール「アメリカンスクール・イン・ジャパン」の生徒を対象に、オンラインでの GV プログラムを初開催しました。本企画では、全 3 回にわたり現地インドネシアのスタッフを招いて、トゥクソノ村での支援の必要性や、同校の支援のもとホームオーナー（建築支援の対象となったご家族）となったジュニアティさん一家の暮らしを紹介するとともに、家が建つ過程を共有しました。ジュニアティさん一家から届いた動画メッセージには、「家を持つことができると知ってから、幸せを感じています。どう感謝の言葉を伝えればよいのか分かりません。とても感謝しています」そう感謝の言葉が述べられ、生徒たちにとっては、日本から住まいの大切さ、そして住まいを支援する意義について考える取り組みとなりました。

Virtual GV Reunion 開催

GV への参加を通じて出会った家族やその地域の今を伝えることでトゥクソノ村への新たな支援につなげることを目指して、3 月、インドネシアのスタッフを交えた GV 同窓会をオンラインで初開催しました。インドネシアのセロバミオロ村を訪れた 60 名近くの方が参加くださり、参加者からは「画面越しではありますが、2 年ぶりにホームオーナーさんの顔をみることで、今どきのように私達のことを思っているのか知ることができて非常に嬉しく、涙が出ました」、といった声や「セロバミオロ村の支援の成果を数字で知ることができて、改めて住居支援の大切さを知りました」といった声が寄せられました。



＜施設の完成予想図＞



すべての人の健康を守るために、新プロジェクト始動

トゥクソノ村が抱える課題の一つが、保健サービスへのアクセスです。衛生環境が乏しい脆弱な住まいに暮らすことで、同村では、幼児の発育阻害が報告されています。こうした問題を解消するには、特に妊婦、そして生まれてきた赤ちゃんの健康観察が欠かせません。しかし、村には地域保健の機能を担う施設がなく、今は村長の家を間借りし、最低限の検診が行われている程度です。そのため、健康観察に必要な器具を備え、地域の保健師が常駐できる施設の建築が求められていました。こうしたニーズに応えるため、Virtual GV Reunion や 4 月のチャリティガラを開催を通じて施設建築に向けてファンドレイズを行いました。そして、この 6 月末、遂にプロジェクトが始動しました。施設の完成は秋ごろを予定しています。ご支援くださった皆さま、ありがとうございました。



2021 年秋から 2022 年春にかけて、キャンパスチャプターに所属する全国の大学生を対象に、「まちづくり」をテーマとしたスタディツアーを兵庫県丹波市で 5 回実施しました。本企画では、丹波市を事例に日本が抱える高齢化や過疎化問題への理解を学生たちに深めてもらい、丹波で取り組まれるさまざまな住民主体のまちづくりの現場を訪れ、お話を伺うことで、まちづくりを担う若者の育成を目指して開催しました。また、学びだけではなく、まちづくりの一環として取り組まれる古民家改修にボランティアとして参加する機会を設けました。全 5 回の企画に参加した総勢 40 名の学生からは、丹波の方をはじめ、大学の垣根を越えた学生との交流を通じて、まちづくりを考えるきっかけになったといった声や、視野や価値観を広げられたといった感想が寄せられました。本企画の実現にあたり助成くださった積水ハウスマatchingプログラムの皆さま、ありがとうございました。

400名の高校生をGVに引率した先生へのインタビュー：サンディ先生（元 アメリカンスクール・イン・ジャパン）

アメリカンスクール・イン・ジャパン（ASIJ：インターナショナルスクール）にはクラブ活動の一つに「ハビタット・クラブ」があります。クラブの歴史は長く、多くの生徒たちが海外建築ボランティア「グローバル・ビレッジ（GV：Global Village）」に参加くださっています。このクラブの顧問を務められたお一人がエクアドル出身のサンディ先生です。ASIJに着任された翌年の 2007 年からこの春まで、約 15 年間クラブの活動を支えてきました。「ハビタットの理念が心に響きました」そう話す背景には、先生のお母さまの言葉が影響していたそうです。「私たち人間にとって、安全欲求を満たす『住まい』を持つことは、勉学に励み、安定した仕事に就くきっかけになります」と先生は話します。

サンディ先生はこれまでに 400 名を超える生徒を引率し、合計 8 カ国で 10 度の GV に参加しています。引率にあたっては、膨大な必要書類を用意し、保護者への説明会を行うなど、多くの準備が必要になる上、GV 期間中は、生徒たちの健康と安全を守る重責を絶え間なく感じていたそうです。「引率する先生は、一度に 22 名から 30 名の生徒たちの保護者になるのよ！」そして、「GV 渡航前には、いつも生徒たち一人ひとりが元気で、幸せに、そして素晴らしい仕事を成し遂げたという誇りをもって帰国できることを祈っていました」と教えてくれました。

「どの GV も忘れられない貴重な思い出です」そう話す先生は、これまでの GV 活動を振り返りながら、「たとえば、バリ島では夫に先立たれた 3 人の女性と家の建築に携わりました。フィジーでは、午後になると子どもた

ちが集まってきて、笑いと喜びにあふれた時間を過ごしました。スリランカでは、ココナッツが好きだと私が言うと、その二日後、休憩時間にココナッツが用意されていました。スリランカの人たちの優しさを忘れることができません。ベトナムでは、レンガを積んで 2 軒の家を建てました。生徒たちは作業の難しさと、根気強く作業の仕方を教えてくれた熟練の大工さんの優しさに驚いていました」と、それぞれの国での活動を鮮明に思い出していました。そして、GV に生徒たちを連れて行くことがいかに意義のあることかを教えてくれました。「GV に参加することで、普段とは異なる形で生徒たちは親切さや寛容さに触れ、幸せを感じることができます」そして、「ホームオーナー家族とのつながりから、生徒たちは、私たちは皆同じ人間であり、等しく必要なモノや希望、夢、願望を持つことを理解することができます。こうした学びは、共感力があり、寛容さや他者に対する思いやりのある人間を育み、やがてこの世界をより良いものにしていこう」と話されました。

この春先生は退職され、ご夫婦で日本を離れ新天地で生活をスタートさせました。『住まい』への情熱は多くの生徒たちを育て、これからも周囲の人々に影響を与え続けることでしょう。この場をお借りし、これまで活動をお支え頂きましたことに感謝申し上げます。

